

お茶大 柳沢 澄子
順天堂大 ○福島 照子

1. 従来の既製服サイズ案が採用してきた体型分類法、すなわち、2～3の代表的測度によって体型を分類し、同測度から他の諸測度を回帰推定する方法は、確かに簡便かつ実地的な方法である。しかし、この分類法の根本であると考えられる、代表的測度の決定に関する理論的裏づけは、やや薄弱であるように思われる。以上の見地から、演者等は、生体計測項目中統計的に最も有効なる項目を選定し、これらと現行サイズ案との間の精度上の差異を明らかにすることを試みた。

2. 資料は、1964年、日本人女子大学生200名について計測した30項目の生体計測値である。代表的3測度の選定には、30項目相互間の相関行列に基づいて、因子分析法を応用した。

3. 分析の結果えられた頸推高（または身長）・体重・背肩幅の3測度によれば、全変動の28.96%、25.91%、8.62%、計63.49%がカバーされる。これを現行サイズ案と比較すると、日本における身長・胸囲・背肩幅系によれば、全変動の60.92%が、また、アメリカ Commercial standard における身長・胸囲・腰囲系によれば、全変動の57.62%がカバーされており、精度の上では、身長・体重・背肩幅系が最も優れていることがわかった。